



第2図 エネログラム

御殿場、太郎坊等の地上観測値から得られた状態曲線(右)および湿度分布(左)

第2図は自由大気中の状態曲線ではないが、当時山体附近の自由大気中のゾンデ観測資料がなかったため、又山雲が山体に極めて近い大気中に発生すること、6合目附近からは樹木もなく地物の影響が少いこと、前述のように自由大気中と山体の風の状態がほとんど同じであることから考えて、一応自由大気におけると同様な考えで、山体附近の安定度を見る。6時には太郎坊より下の高度では顕著な湿潤不安定を示し、五合五勺より上では湿潤不安定になっている。7時以後は御殿場と太郎坊間の高度では殆んど湿潤中立か安定を示し、太郎坊より五

合五勺迄は僅かに湿潤不安定を、五合五勺より上では、この不安定度は急に増している。

従って何らかのショックに依り上昇気流を生じた場合に最も早く雲を形成するのは五合五勺より上である。更に各高度の凝結高度を求めると第4表の様になり、早朝

第4表 凝結高度の変化(mbで現わす)

時間	6時	7時	8時	9時
御殿場	20	20	40	40
太郎坊	6	31	46	37
五合五勺	43	45	50	58
七合八勺	36	26	26	43
山頂	26	31	33	42

時には御殿場と太郎坊の凝結高度が最も低いが時間と共に凝結高度が高くなり、逆に七合八勺と山頂の凝結高度が小さくなって来る。特に7時と8時における七合八勺の凝結高度が最も小さいが、この高度でも9時以後には凝結高度は急に高くなっている。

以上の気象状態を総合すると時間的には7時から8時頃、高度では七合目附近において積雲が発生し、且成長しやすい条件にある。更にこの日の大気中の風速が弱いことも夏雲の発生に好適であったようである。

書評 「気候学」—気象学講座 矢沢 大二著

地人書館刊 B 6 122頁 300

本書は一口にいえば地理学者の書いた気候学の評論である。§1 気候学の発達、§2 気団と気塊、§3 Singularity、§4 天候気候学、§5 天気規則の分析、§6 気候分類に関する諸問題の六章よりなっており、終りには360ほどの参考文献があげられている。

一読して感心することは著者が非常によく文献を読んでおられ、歴史的に個々の論文の内容がよく紹介されていることである。とくに Singularity に関連したことがくわしく紹介されており、現在の気候学における問題点がよくわかる。§4、§5なども見方によれば Singularity を別の面から観察したものともいえる。従来の気候学の著書にのっていない汎天候の統計などがのっており、この点で世界にもあまりない、ユニークな著書といえよう。

ただ評者がこれを見て物足りなさを感じる点は現場の利用者がすぐつかえるような形になっていないことである。歴史的に個々の論文の内容などはかなりよく述べられているが、現状としてはどれが一番適当かという著者の意見があまりでていない。また福井博士の著書にみられるような普通の気候表とか気候図はほとんどなく、気候学を生活に利用しようという人達にはあまり参考にならない。この講座の狙いは標準のテキストという意味が

あったように聞いているが、この著書ではむしろ総合報告と論文の中間という感が深い。冒頭に評論といったのはこの意味である。しかし、この点は著者もはしがきで述べているように本講座の頁数の関係が大きいであろう。

つぎに、これも著者がはしがきで述べていることではあるが、日本の気候に関する研究の紹介が比較的少ないことである。荒川博士、福井博士の研究なども若干は紹介されており、評者の研究も紹介されていることは光栄であるが、そのほか二、三のものしか紹介されていない。これは本書の狙いが Singularity のような最近の気候学での問題に中心をおいた為であり、当然の帰結でやむおえないことではあろうが少しさびしい。

つぎに汎天候の紹介に際し Elliot の天気図分類のことが全然紹介されていないのは不思議な気がする。またほんの一、二例ではあるが、専門の違いであろうか用語にも不適当と思われるものがあり、内容がつかみかねるものがある。6頁 気温経日変化というのがその一例で、前日差の絶対値の平均を示すものであろうか。

どうも少し酷評をしたようであるが、これは講座の中の気候学という立場から評したからであり、実は評者は大面白く通読した。ごく新しい Thornthwaite の気候分類の意義など非常に興味があった。気候学だけでなく、気象学を学ぶものにとっては一読すべき著書であろう。(高橋浩一郎)